

5月5日の自然散歩記

「豊橋公園の自然」(恒川敏雄著)

昭和58年発行より (p. 69)

五月五日は男の節句。連休最後の日。好天に誘われ散見。おりから美術博物館でフォト、書展が開かれていたのを鑑賞する。力作ぞろい。北のロビーで一服。窓から見た公園はいまや緑最高潮。一幅の名画である。西の窓からは樹木風景が見える。南庭には新設の洋風泉池が騒いでいる。

マルバウツギとゴマキの花期を求めて城下に向かう。ガケ下の樹陰は花や野草の花ざかり。春の花が出そろった。黄色い花、紫の花があちこち。タンポポ類の白玉が多くなった。アカミタンポポの検索の好期。ヤブヘビイチゴとヘビイチゴの区別もできる。イチゴツナギとミゾイチゴツナギの差別、ヤブタビラコとオニタビラコ、スズメノカタビラとカラスノカタビラなどゆっくり検鏡しよう。木々もその装いを新しくかえ、自然の移り変わりの早さを感じる。

タブの赤芽が葉心から出て立つ。シラカシの花が垂れ、アカメガシワの赤若葉、センダンもつぼみと若葉が同時に開く。クスノキはいやがうえにも黄緑を輝かして目にはえる。ケヤキの葉の上に虫こぶがかわいらしい。ニセアカシアは開花寸前。ムクの花は触れるとこぼれる。ゴマキはすでに盛りをこえている。マルバウツギはまだつぼみ。花期は五月中旬である。リュウキュウツツジ系はいまが超満開。王座はオオムラサキ。豊川の洲ではシジミとり。水上にはボートの群れ。モチクサ摘みの婦人達。春もこれで終わり。今年の五月五日は恵まれた。



タブノキの花
(五月4日豊橋公園で撮影)

2011年 定例自然観察会

都市公園の自然 ～豊橋公園の30年



豊橋美術館北側ロビーの窓から見た
一幅の名画のような風景
(5月4日撮影)

第2回(5月8日)

主催:NPO法人東三河自然観察会



NPO法人

東三河自然観察会

1. 「豊橋公園の自然」(恒川敏雄著：昭和58年発行)に「特殊植物(p. 7)」として紹介されているもの

ゴマギ 貸しポート屋近くに一本。初夏、小細花を、かためて咲く。

アズマガヤ 石巻山麓にも見られる日陰植物。

ウマスゲ 濠内、雄穂がぬきんでている。

ハルジヨン 小練兵に見られた帰化植物。

タコノアシ 東三河では珍、最近西三河にも産することが知れた。

マルバウツギ 豊城神社の北斜面に、花期が美しい。

イスノキ 一名ヒョンノキ。隅櫓のわきに根を張る。

ナワシログミ 本丸の西土塁に、常緑。珍。

ラクウショウ 一名ヌマスギ。歩兵第十八連隊当時、何々かの記念樹か。一寸きれいな植物。市役所本館の裏に一本。

クロマツ 森の王者。市役所西南角に残されたクロマツ一株、四囲石垣で保護されていたが水不足で枯死。他の一本は競技場の東南の堤に今尚たこ足をふまえている。クロマツは八町練兵場のシンボル。

ナギ プール飛び込み台の西に一本のみ。市内の寺やお宮に古木がある。平行脈で強じん。

オガタマノキ 春、香り高い白花を開く。花期は短い。公園の正面入り口の芝生の中に、植栽品。

ケヤキ 話題を呼んだ乾のケヤキは樹齢五百年国道づくりで天然記念物解除。豊城神社内に七百年といわれる巨樹。現存する。

イヌマキ 神社入り口右土手に、長く枝を垂れている。古木の証。

スギ 体育館西に林立していたが、あわれ残り木一もと。

三大落葉樹 ケヤキ、ムクノキ、エノキ。



ゴマギ(写真引用：山崎ハンディ図鑑4)

2. 「豊橋公園の自然」(恒川敏雄著：昭和58年発行)に「チョウ(2)(p. 42)」として紹介されているもの(この項は「鈴木氏」の筆による。)

今回はアゲハチョウとシジミチョウについて述べてみる。

ほとんどの種は、春から秋まで姿を見ることができる。

ナミアゲハは至る所で見かける極めて普通の主で、幼虫はミカンやサンショウの葉上で見つかる。大変よく似たチョウで黄色の強いキアゲハは、数は多くない。幼虫はニンジンやパセリなどの葉を食べて育つ。

豊橋の木にも指定されているクスノキの葉を食べて育つチョウは、アオスジアゲハである。盛夏のころ、クスノキの周囲を活発に飛び回る。黒地に水色の帯びのあるチョウは本種である。庭先などの打ち水にも吸水に飛来することがある。



春に見る個体は数があまり多くなく、水色は薄く、帯の幅はやや広くなる。

真っ黒な大型のクロアゲハや黒地で後羽に大きな白紋のあるモンキアゲハなどは、やや木陰を好む傾向がある。したがって吉田城跡付近で見かけることが多いが、個体数は少ないようだ。

チョウの仲間では最も小型なグループはシジミチョウ類である。春から秋まで発生をくり返す種が多いが、道路沿いの草花によく訪れる春生のベニシジミは美しい。夏生の個体は黒化して春ほどの美しさはない。

カタバミの葉を食べて育つヤマトシジミは、晩夏から秋季には数を増し、日当たりの良い草地にはどこでも見ることができる。

似た種でルリシジミやツバメシジミも生息している。

← ベニシジミ (写真引用：ヤマケイポケットガイド④)

3. 「豊橋公園の自然」(恒川敏雄著：昭和58年発行)に「公園の野鳥(上) (p. 103)」として紹介されているもの(この項は「富安氏」の筆による。)

四季を問わずに見られるのはトビ、スズメ、キジバト、ヒヨドリ、カワラヒワ、ムクドリ、ハシボソガラスなど。しかし、一年を通せば五十種類以上観察される。

ツバメのような夏鳥、ツグミやハクセキレイのような冬鳥、ヒレンジャクのように春先にだけ姿を見せるものなど、季節によって種類もさまざまである。

この季節、人かげの少ない芝生の上ではムクドリたちが三々五々エサをとり、若葉の樹上でカワラヒワが「コロコロ、ピーー」とさえずっている。ツバメやコシアカツバメは忙しそうに空中を飛びながら、虫を捕らえている。同じ夏鳥のキビタキやオオルリ、センダイムシクイなどが繁殖地へ向かう途中、本丸跡付近の樹間で、美しい姿や得意のノドを披露してくれることもある。

初夏の宵ヤミの中で「ハウハウ、ハウハウ」と鳴いているのはアオバズク(フクロウ科)で美術博物館付近の高木にとまっているのや、テニスコートのナイター照明に群れる蛾(ガ)を追い回しているのを見かけたりする。大木の樹洞で営巣し、こん虫を主食とするこの鳥にとって近ごろは、安住できる環境が市内で、めっきり少なくなってしまったことは残念である。



頭からの上面は緑色みの強いオリーブ色で、頭尖線、眉斑、頬は黄白色で、黒褐色の頭側線がある。腹の中央は淡黄色。

センダイムシクイ



アオバズク

(写真引用：二つとも「絵解きで野鳥が識別できる本」 叶内高篤著)